ISSN 0915-3284

東京大学史史料室ニュース

第31号　2003・11・30

目　　次

附属農場の過去・現在・未来－開場125周年を迎えて ……2
東京大学史史料室所蔵　平賀譲関係文書の目録刊行について ……5
沿革史紹介：『東京大学大学院教育学研究科・教育学部
創立50周年記念誌』……7
史料室日誌抄録 ……10

附属農場の過去・現在・未来（本文参照）

図１　迅速測図に記された明治10年代の農学校とその周辺の土地利用

図２　初代農場長原凞教授の胸像

附属農場の過去・現在・未来ー開場125周年を迎えて

武内　和彦

1．駒場農学校に設置された附属農場

東京大学大学院農学生命科学研究科附属農場は、明治7（1874）年4月現在の新宿御苑内に創設された農事修学場が、明治11（1878）年1月駒場野に移転し農学校と改称された際に校内に設置された農場をその始まりとする。この農場は、明治23（1890）年6月には、新設された帝国大学農科大学の附属農場となった。爾来、今日まで、附属農場は農学に関する教育研究の重要な場であり続け、本年で開場125周年を迎えた。そこで、この機会に、私なりに附属農場の変遷をまとめてみた。

設置された当時の附属農場周辺の状況を知るために、まず入手したのが、日本で最初に近代的測量技術によって作成された迅速測図と呼ばれる地形図である。フランス人技師の指導で陸軍が明治13（1880）年から明治19（1886）年にかけて関東一円で作製したこの地図（縮尺2万分の1）は、彩色地図で、しかも随所に植生記号が記入されていて、当時の景観を知るには絶好の史料である。この地図の上に、東京大学史史料室に保管されている東京帝国大学一覧から明治26～27（1893～94）年当時の附属農場の敷地輪郭を落としてみたのが図1（表紙）である。当時の農学校が、いまの駒場周辺からは想像もできないような、純農村に囲まれた地にあったことがよく分かる。

農学校は、東京府武蔵国荏原郡上目黒村の北端に位置し、南豊島郡代々木村と接していた。迅速測図にも「農学校」の名称が記入されているが、当時、校舎はごくわずかしか建てられておらず、敷地の大部分に樹林地や農地が広がっていた。農学校の周辺では、台地面の大部分は畑地で占められ、緩やかな段丘斜面には茶畑がまとまって分布し、また急な段丘崖に沿って雑木林が帯状につらなり、谷底低地には谷津田（谷戸田）のような形状をもつ水田が見られた。

農学校も、ほぼ同様に、台地は主に畑地として、台地を刻む谷底低地は主に水田として使い、急斜面には雑木林もあった。当時の農場は、日本の伝統的な農法による本邦農場と西洋の近代的な農法による泰西農場に分けられていた。東京大学百年史編集委員会（1987）に付図として掲載された明治17（1884）年当時の駒場農学校平面図によると、農場の大半は泰西農場であり、本邦農場は東端にわずかの面積を占めていたにすぎない。地図上で「草」と表現されている草地は、この平面図では、牧草園、放牧地、泰西農場の一部となっており、羊舎も置かれていた。

2．初代農場長・原教授とその胸像

明治39（1906）年3月、官制によって東京帝国大学農科大学附属農場に農場長を置くことになった。初代農場長に命ぜられたのは、農学実科主任であった原熙助教授である。原助教授はその後教授になり、大正14（1925）年3月まで、実に19年の長きにわたり農場長を勤めた。

関東大震災の翌年の大正13（1924）年東京帝国大学農学部に入学し、原教授から造園学を学んだ佐藤昌（元公園緑地協会会長）は、当時のことを回想して次のように述べている（佐藤，1997）。「教室群の北のはずれは農場になっており、その圃場の一角には小さな温室と果樹園とがあったし、またその中に農場長の官舎があった。農場長は長らく原教授の兼務であり、先生はこの官舎に長らく住まわれて、そこが先生の住居であると共に書斎であり研究室であった」。

ところで、弥生キャンパス内の農学部1号館にある筆者の教授室（緑地創成学研究室）には、原教授の胸像がある（表紙：図2）。緑地創成学研究室の前身である園芸学第二講座の初代担当となった丹羽鼎三教授が、講座創設に努力した原教授を偲んで農学部圃場に設置したが、その後、圃場の温室拡張に伴って農学部1号館内の教授室に移されたものである。移設の際に、木製の台座が創られたが、圃場に据えられていた当時の台座であった巨石は、いまも農学部圃場にある。

3．附属農場の田無移転

昭和10（1935）年8月、第一高等学校との敷地交換により、農学部は駒場から本郷（弥生地区）に移転するが、弥生地区では十分な圃場面積を確保できないことから、附属農場は北多摩郡田無町に移転した。この敷地交換を記念して創られた駒場農学碑は現在も駒場Ⅰキャンパスの講堂の南側にあるが、これを設計したのが前述した丹羽教授である。筆者の研究室には、当時丹羽教授が撮影した、除幕式で式辞を読む高橋偵造農学部長の姿が写されたガラスの写真原板が保管されており、その写真が東京大学百年史の部局史（第7編、農学部）に掲載された。

附属農場は、林学科田無苗圃（現在の附属演習林田無試験地）とあわせ36.7haの敷地を有することになった。その後、学内外の他の用途に転用された土地もあり、附属演習林を除く田無地区の附属農場の面積は22.2haとなって今日に至っている。また附属農場の田無移転に先立ち、大正15（1926）年3月には、神奈川

県二宮町に果樹園が移転し、附属農場二宮果樹園と称されるようになった。一方、田無（現在の西東京市）にある附属農場本場は多摩農場と称されるようになった。

多摩農場もまた移転した当初は、周辺は純農村に囲まれていた。迅速測図によると、明治10年代当時の田無村は、「雑樹」の平地林と「畑」からなり、道路沿いに集落が点在していた。現在の多摩農場の北側敷地と南西側敷地の過半も「雑樹」で占められ、「松」の記号も見られることから、一部松林を含んだ雑木林であったことが分かる。また、南西側敷地には、「畑」の記号があり、この部分は明治10年代当時から畑地として使われていたことが分かる。

ところで、農場移転からは10年ほどが経過した当時の多摩農場とその周辺の土地利用の状況は、米軍によって昭和22（1947）年に撮影された約１万分の１の空中写真からよく分かる。この空中写真に多摩農場の輪郭を落としてみたのが図３である。米軍撮影によるこうした空中写真は、日本を統治するための一環として撮影したものであり、戦後の土地利用変化を研究するうえで、貴重な史料となっている。

この空中写真から、多摩農場より南側、西武新宿線の田無駅に近い部分はすでに市街化が進んでいることが分かる。逆に北側には、大規模な工場の存在が際立っている。この工場は、軍用機を生産していた中島飛行機（株）の発動機部品工場であり、戦後は建設機械の製造工場となった。一方、多摩農場の東には、一部に初期の住宅団地が見られるほかは、畑地が広がり、屋敷林をもつ農家が点在していた。初期の駒場と同様、田無でも、附属農場は周辺の農村景観に囲まれていた。

多摩農場に目を転じると、現在の圃場区画につながる大区画圃場への整備が進んでいることが分かる。農場周辺の畑地との圃場規模の違いは空中写真からよく分かる。また、現在の田無試験地に隣接する農場西北側では、雑木林を開墾して農地化を進めている様子が見てとれる。また当時は、二つの飛び地に水田が確保されていたが、のちに本場内に水田が整備された。しかし、全体として見れば、建物も含め、当時と今日で多摩農場の施設配置に大きな変更はない。

ただし、この空中写真には、いまはなくなった建物も見られる（東京大学大学院農学生命科学研究科附属農場，2003）。一つは、農場東端の突出部にある３つの官舎で、その一つは昭和12（1937）年から昭和28（1953）年まで「経済農場」の名で附設されていたものである。ここには、東京近郊によくあるような農家を敷地内に住まわせ、観察・記録・改善のために正確な「日誌」の提出を求めていた。また写真に写っている建物の一部は、昭和17（1942）年に附設された南方地域における農業開発のための熱帯農業員養成所の生徒寮であり、戦後は学生寮（田無寮）となったが、昭和63（1988）年に閉寮となり、現在は農地に戻されている。

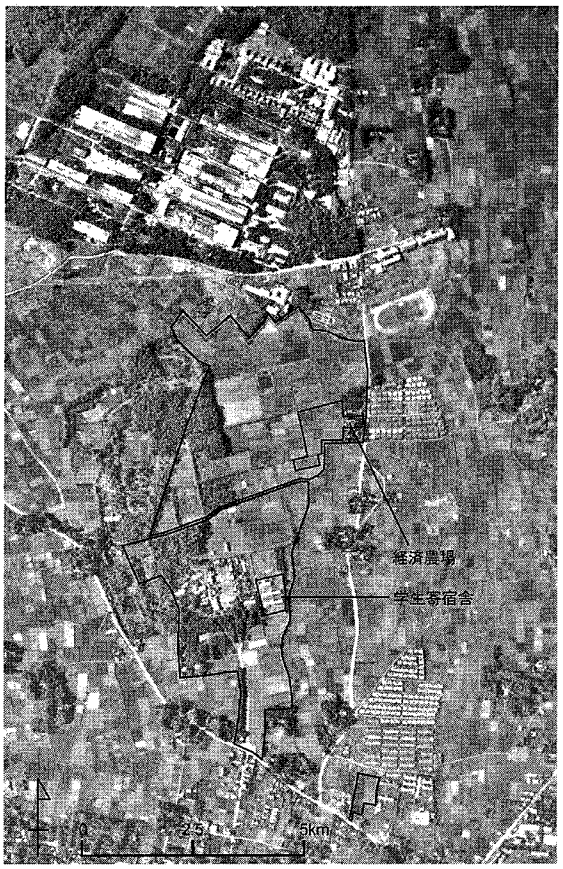


図３　米軍の空中写真に写った昭和22年当時の多摩農場とその周辺の土地利用（飛び地は水田として使われていた北原圃場）

４．附属農場の再移転

このように長年にわたって東京大学の農学に関する教育研究を支えてきた多摩農場であるが、千葉県に設置された柏新キャンパスを含む東京大学全体のキャンパス整備の観点から、近い将来、二宮果樹園とあわせ、千葉市花見川区にある東京大学総合運動場（検見川運動場）の一部（18.1ha）に移転することが決定した。検見川地区には、附属農場移転予定地に隣接して附属緑地植物実験所（4.7ha）があり、今後は両者を発展的に統合させて、新たにフィールド農学センター（仮称）を設置すべく検討が進められている。この新センターでは、これまで附属農場が担ってきた附属施設としての役割を継承しつつも、環境の世紀である21世紀にあって、低投入持続的農業システムや環境保全型農業システムの確立に研究の重点を置くとしている。

検見川地区への附属農場移転は、純農村へ移転してきたこれまでの歴史と異なり、市街化地域への移転と

なる。大都市の中で、附属農場が存在するということの意味を改めて考えてみる必要がある。それは、都市と農村の融合を説いたエベネザ・ハワードの「田園都市論」の再考を意味するのかも知れない。現在検討中の整備計画で、このフィールド農学センターの一角に、「エコミュージアム」と「農業博物館」(いずれも仮称)を設置し、市民に公開する場としようとしているのも、都市に創られる附属農場の新しい役割を考えた結果にほかならない。

この検見川の地も、かつては純農村であった。迅速測図に示された明治10年代の検見川地区とその周辺は、台地に畑地、谷津に水田が分布し、両者の境となる段丘崖には樹林が帯状に連なっていた。戦前、この検見川地区に、学生の勤労奉仕により総合運動場が建設されようとしていたが、戦時体制にあって、農場経営に転換を余儀なくされ、戦後は食糧難に対処すべく薯類、雑穀、野菜類のほか牛乳も生産されていたという(東京大学百年史編集委員会編, 1987)。昭和24(1949)年に米軍が撮影した空中写真でも、検見川農場で農業が営まれていた様子がよく分かる(図4)。

検見川地区を再び農場として復活させることは、最近注目されている都市の自然再生にもつながる。人間と自然が共存する姿としての農の営みは、環境時代の都市にあって貴重な存在となるはずである。附属農場移転と新センター設立を成功させるためには、環境保全と社会貢献の面で、これまで以上の配慮が求められよう。そのようにして、附属農場移転が完了した暁には、初代附属農場長・原先生の胸像を、その台座の巨石とともに検見川の地に移そうと考えている。

最後に、本稿の執筆に際して、史料の整理等で、東京大学大学院農学生命科学研究科附属農場の米川智司助教授にお世話になったことを付記する。

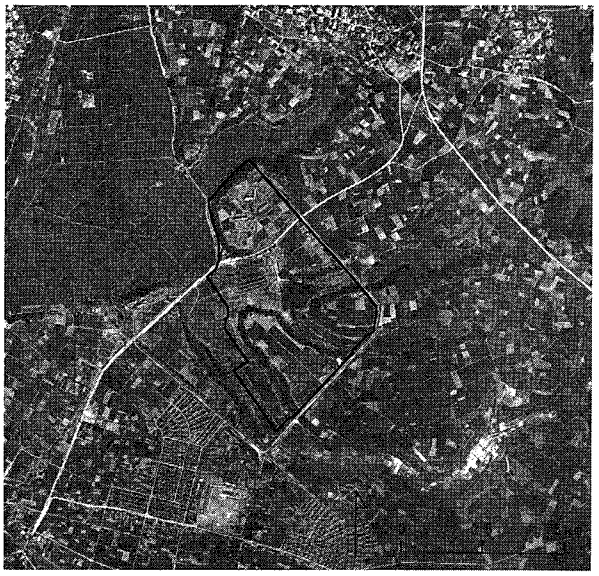


図4　米軍の空中写真に写った昭和22年当時の検見川キャンパスの緑地植物実験所(輪郭で示した敷地の道路を挟んだ北西部分)および附属農場移転予定地

参考文献

佐藤昌編著(1997):造園学の始祖　原熙.(社)日本公園緑地協会61pp.

東京大学大学院農学生命科学研究科附属農場(2003):東大農場年報, No.10, 2002, 94pp.

東京大学百年史編集委員会編(1987):第7編　農学部. 東京大学百年史, 部局史, (2), 647-1041.

東京大学百年史編集委員会編(1987):第25編　総長室・事務局・学生部. 東京大学百年史, 部局史, (4), 1017-1175.

(農学生命科学研究科教授)

「東京大学史史料室所蔵　平賀譲関係文書の目録刊行について」

畑野　勇

海軍技術官の最高位に当たる技術中将にして、退官後東京帝国大学第13代総長となった平賀譲に関係する大量の史料が本史料室に寄託、保管されている。これらの史料（本史料室では「平賀譲関係文書」と呼称）はこの数年間、室外者への閲覧業務を停止したうえで、本格的な整理作業を続けてきたが、この程一応の整理を終え、目録の刊行と閲覧業務の再開とが可能になったので、ここに至る経緯を概括しておく。

1　平賀譲文書の概要

平賀譲文書は、海軍関係と東京帝国大学関係とに大別されるが、海軍関係のごく一部のものが諸般の事情で、横浜国立大学、大分大学、国立科学博物館、国立昭和館などに分散の状況となっているが、これらのものは機会を得て回収されなければならない。

平賀文書のなかでも海軍関係は、平賀が計画した「八八艦隊」を中心とする艦船計画資料（計画書、報告書、意見具申書、計算書、図面、データブック、事例、訓令）のほか海外視察報告、雑誌記事スクラップ、パンフレット、参考図書、日記、書簡、写真など膨大な量にのぼり、目下、データベース化した目録をもとに逐次マイクロフィルム化がすすめられつつある。

海軍関係にくらべると、東京帝国大学関係の一次史料はきわめて少なく、めぼしいものは総長式辞・告辞や平賀メモ日記くらいしか見当たらない。賛否あい半ばする「平賀粛学」や「大学新体制」についても、史料の残欠がいくらかあるものの、全容を知るには、当事者の回想録や日記、あるいは当時の諸紙によって事実の再構築を試みるほかない。なお新聞については、平賀自身が総長時代の各紙を驚くほど広範にスクラップ・ブックに整理したものがある。ほとんど一次史料に匹敵する情報源といってよいほどのもので、平賀文書の一つにされている。

2　平賀文書の受入れ・整理の経過

1976（昭和51）年に本室（当時は百年史編集室）は『東京大学百年史』編集の際に、歴代総長の史料調査の一環として平賀譲の所蔵史料の調査を行った。その時点ではご遺族の平賀輝子氏（平賀譲の次男長男謙一氏の未亡人）が所蔵されていた史料のうち、東京帝国大学関係の史料（書翰・新聞切抜きスクラップなど）について仮整理と復刻の作業を進め、1982（昭和57）年７月に『東京大学史史料目録９　平賀譲史料目録』を発行した。また東京帝大関係以外の史料については、平賀譲の次男平賀重孝氏、長男謙一氏の長男平賀健氏、長女稲葉晴子氏の三氏によって保管されていたが、そのうち艦船関係の史料は謙一氏が整理の途中であったものを謙一氏逝去後の1978（昭和53）年頃、平賀の高弟牧野茂氏（海軍技術大佐）が謙一氏未亡人平賀輝子氏より保管を依頼され、海軍技術官の観点から整理に着手した。

その後1981（昭和56）年頃、海軍造船官の「和衷協同」を図る造船会の戦後継承組織を中心として平賀譲伝刊行の要望が生まれ、たまたま平賀譲伝を計画していた元海軍技術大尉の内藤初穂氏が衝に当たることとなり、主として艦船関係史料や総長式辞・告辞について牧野氏と分類整理をすすめ、1985（昭和60）年、その一部を牧野茂監修・内藤初穂編『平賀譲遺稿集』として出版協同社より刊行した。また伝記については、内藤氏執筆の『軍艦総長　平賀譲』が1987（昭和62）年に文芸春秋社より刊行され、1999（平成11）年には増補改訂版が中公文庫の一冊となった。

内藤氏は『平賀譲遺稿集』の編纂時に平賀関係史料の調査を行い、艦船・総長関係以外の史料（日記等）が上記の三氏によって保管されていることを知り、その事実や保管物件に関して、1986（昭和61）年に論稿「平賀譲伝について」を『学士会会報』771号（1986年４月）に発表した。東京大学史史料室（当時は百年史編集室）はそれまで、平賀の日記や書翰、書類等が遺族により分散保管されていることを全く把握していなかったので、1986（昭和61）年５月から12月にかけて内藤氏の協力のもと、所蔵状況の再調査を行った。その結果、1986（昭和61）年からその一部を借用する形で受入れを進め、1990（平成２）年12月、平賀家から本史料室に一括寄託の運びとなった。寄託は平賀譲の次男平賀重孝氏、牧野茂氏、戸高一成氏（当時財団法人史料調査会主任司書、海軍史研究者）の三氏によって実施され、その際内藤氏と本史料室の関係者とが立ち会った。

本室に寄託されたこれら史料については、まず中野実・佐々木尚毅の両史料室員が戸高一成氏の協力のもと、仮目録の作成を行った。また両室員は、平賀が総長に在任した期間の日記復刻作業を行い、1939（昭和14）年と1940（昭和15）年の分について、それぞれ『東京大学史紀要』第8号（1990年３月）と、同第9号（1991年3月）とに掲載した。

1996（平成８）年８月30日、平賀文書の管理責任者であった牧野茂氏が長逝された。その遺志を受けて、

1998（平成10）年に本文書を閲覧可能にするためのマイクロ化、及び詳細な目録作成の機運が高まり、室外から造船関係の専門家として山本善之（東京大学工学部名誉教授）、片山信氏（元海軍技術大尉、横須賀海軍工廠勤務）、宮崎晃氏（元三菱重工業勤務）を、日本近代史や海軍史の専門家として戸高一成氏（昭和館図書情報部長）、照沼康孝氏（文部省初等教育局第一教科書調査官）、佐々木尚毅氏（秋田桂城短期大学助教授）、鈴木淳氏（東京大学人文社会系研究科・文学部助教授）、またご遺族代表として平賀重孝氏を招き、これらメンバーに史料室室員の中野実、畑野勇を加え、当面は内藤氏を名目上の責任者とする「平賀文書研究会」を発足させた。これより同研究会では約3年間、本史料室に寄託された平賀譲文書すべてのデータベース化と目録作成の方法、閲覧の方針を協議、主として畑野がパソコンを利用したデータ入力を実施していった。

この間2002（平成14）年１月に平賀重孝氏が逝去され、また同年3月には本史料室の中野実専任室員が急逝する事態が起こり、史料室に後任の専任室員が着任するまで本研究会の運営は中断のやむなきに至った。その後、史料室には2003（平成15）年５月に谷本宗生専任室員が着任、平賀譲文書整理の再開とこのたびの目録刊行が実現した。現在は「平賀文書研究会」の今後の運営方針をメンバー間で協議すると共に、史料のマイクロ化を逐次進めている。

3　平賀譲に関する研究文献

平賀譲についての文献は非常に限られている。生前の平賀の活動を詳細に伝えるものとしては内藤の手による上記『平賀譲遺稿集』『軍艦総長平賀譲』があるが、艦船関係については旧海軍の造船官による回想録の類と、上記「平賀文書研究会」メンバーである山本善之が執筆した論文「平賀譲先生を考える」（関西造船協会『らん』第37～40号連載、1997～1998年）、東京帝大総長時代の平賀に関する記述については『東京大学百年史』の該当部分（通史二、部局史三など）と宮崎ふみ子氏の論文「東京帝国大学新体制に関する一考察」（『東京大学史紀要』第一号所収）、そしていわゆる平賀粛学については『東京大学経済学部五十年史』などが公刊されている。

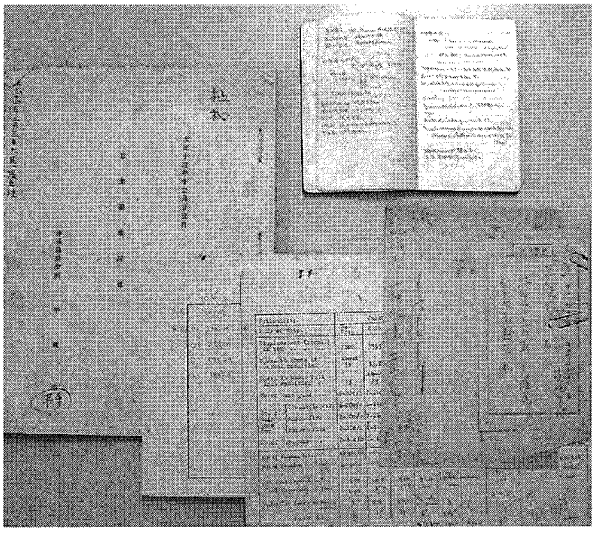
本史料室寄託の平賀譲文書を利用し、公開された本格的な研究は人文社会・自然いずれの分野においても未だなされていない。しかし今後は本目録の完成により、艦船関係史料の技術的価値や平賀粛学当時の日記や書翰の歴史的な価値が明らかにされ、やがてこれら史料を駆使した本格的学術研究の可能性は高まってゆくと思われる。

4　史料の閲覧について

当史料室寄託の平賀譲文書は、ほとんどすべてが高い価値を有する図面や書簡、日記など未刊行のものであるため、破損や亡失の防止に最大限の注意を払っている。そこで平賀譲文書の閲覧希望者には、事前に閲覧希望史料のタイトルと番号（目録に記載されている）とを申し出ていただき、上記「平賀文書研究会」において審議のうえ、閲覧の可否をお伝えする。そして閲覧許可者には、原則としてマイクロフィルム撮影されたものを当史料室において閲覧していただくことになる。当文書の特殊性と、故平賀重孝氏を初めとするご遺族の意向とにより、特殊な閲覧の方式をとらせていただいているが、何卒ご了承されたい。

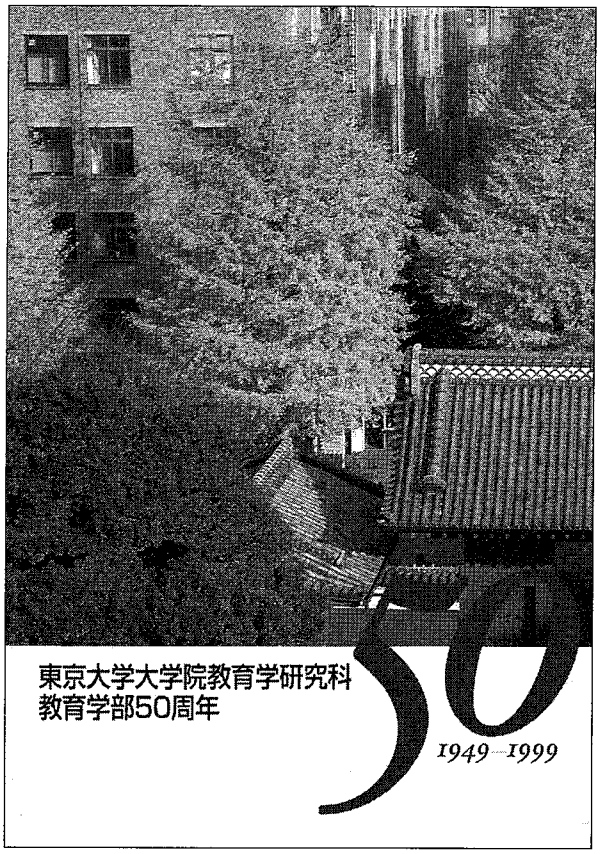
最後に、本史料室への平賀譲文書の寄託に際して、遺族代表としてご協力いただいた故平賀重孝氏、また本史料室で同文書の整理や復刻を行い、「平賀文書研究会」の設立と同研究会の関係事務、そして本目録刊行作業の中心として活躍された故中野実専任室員のご冥福を心よりお祈りする次第である。中野氏にはご臨終の直前に、本目録の一応の完成についてご報告したときに大変喜んでおられたが、存命中に刊行された目録を渡しできなかったことは遺憾の極みである。今後史料室としては平賀重孝、中野実両氏の遺志を継ぎ、平賀譲文書を使用した研究活動の活性化に努力していきたい。

（東京大学史史料室教務補佐員）



沿革史紹介『東京大学大学院教育学研究科・教育学部創立50周年記念誌』

小川　智瑞恵



『東京大学大学院教育学研究科・教育学部創設50周年記念誌』（1999年５月発行、全47ページ）は、大学院教育学研究科・教育学部の土方苑子委員長をはじめ、広田照幸委員、下山晴彦委員、佐藤学委員、鈴木真理委員、白山正人委員、中野実委員によって編まれている。

凡例に示されているように、『東京大学教育学部30年記念誌』（1982年３月）が既刊されているので、本誌では最近20年に重点を置き、この間の歴史を編纂するために教育学部の教授会議事録を基本資料としたという。写真については過去の写真の提供を呼びかけるとともに、今日の教育学部の様子を新たに撮影したものをふんだんに掲載している。それが本誌の特徴の一つとなっていて教官と学生の生き生きとした真剣なやりとりが聞こえてくるような様子をはじめ建物や教室のたたずまいが伝わってくる。もう一つの特徴は、見開き２ページがひとつの単位となり年表を軸として、写真、コラム、各種の図表によってこれまでと現在の教育学研究科・教育学部の歴史をたどることができる点である。まず教育学部の前史すなわちドイツ人エミール・ハウスクネヒトが教育学教師として講義を始めた文学部教育学科時代の歴史から新制大学発足以前までの1877－1948年がコンパクトにひとつの単位にまとめられ、そこに掲載された文学部教育学科卒業写真（1926年）からは当時の先生方や今日から見ると圧倒的に少ない学生をしのび、震災後の文学部仮教室棟の写真からは教育学の教育がどこでおこなわれていたかを知ることができる。なお教育学部創設史料は現在は学部長室に大切に保存されていると聞く。以下、本誌は次のような構成になっている。「1877－1948　教育学部前史　文学部教育学科／1949－1962　教育学部創設の頃／1963－1970　東大紛争／1971－1979　改革構想の流れ／1980／1981－82／1983－84／1985－86／1987－89／1990－1992／1993－1994／1995－1996／1997－1999」。この構成からも近年の教育学部・教育学研究科の記述に力点を置いたことがわかる。この最近20年間の教育学部について、佐伯胖氏は近年顕著になっている教育問題の発生を受けて設立された「学校臨床総合教育研究センター」は、「学部・研究科全体として、実践性と総合性を取り入れた教育研究の重視」への移行を象徴し、また「大学院重点化とともに導入された大講座制」によって自由な研究活動が展開されているという（「大きく変わった50年、教育学はもっと変わる」４頁）。実践研究と大学院重点化はこの20年の間におこった教育学部の歩みを知るにあたって特筆すべき変化であった。

また、1973年から1996年まで学部長の責を負った教官たちによる「学部長経験者座談会」が1999年１月７日に設けられた。その内容は「教育学部改革これまでとこれから」と題され４ページにわたって掲載されている。この座談会のほぼ全体を記録したという『東京大学大学院教育学研究科・教育学部50周年記念誌座談会』（1999年）を合わせて読むことによってより詳細にその模様を知ることができる。「学部改革」については「総合大学院構想」「大学院重点化の動き」「講座とポストの変遷」「駒場との関係」「助手ポストの問題」「カリキュラム関連：総合化」「大学院重点化の経緯」「実践重視：１専攻６コースへ」「世代交代と人事」という観点から詳しく語られている。さらに「改革で残された問題：カリキュラム」、「附属との関係」「社会的役割と国際化」「建物問題」「学部長と附属校長」「教職関係」「学部改革を形作ったもの：教官研究会」という柱が立てられ、カリキュラムに関しては、天野郁夫氏が、今のコースが学問のロジックに立って作られていて学生のためにできていないことを指摘し、学部内、学科間の壁を薄くし、大学院でも他コースの単

位の必修化によって蛸壺化をふせぎ、授業科目を整理する必要性など今後の課題が示されている（「改革で残された問題：カリキュラム」『50周年記念誌座談会』26～28頁）。

『創立50周年記念誌』および『50周年記念誌座談会』作成により、教授会記録などをデータとして整理・保存し、同時に学部長経験者の座談会を開催することによって学部改革の流れなど教育学部・教育学研究科の歴史が明確になった。これらはこれまでの歩みを確認し今後のあり方を考える基盤の役割を果たすであろう。また教育学部に在籍するあるいはこれからここで研究を始める学生・院生にとっても貴重な示唆に富んだ記念誌と言えよう。

（東京大学史史料室教務補佐員）

受贈図書一覧（平成15年3月～8月）

幕末維新期漢学塾の研究
　幕末維新漢学塾研究会　平成15年2月
津田塾大学100年史
　津田塾大学　平成15年3月
津田塾大学100年史　資料編
　津田塾大学　平成15年3月
関西学院史紀要　第9号
　関西学院　平成15年3月
東北大学史料館所蔵　東北大学関係写真目録
　東北大学史料館　平成15年3月
立命館百年史紀要　第11号
　立命館百年史編纂室　平成15年3月
北海道立文書館研究紀要　第18号
　北海道立文書館　平成15年3月
北海道立文書館所蔵公文書件名目録　18　札幌県治類典（7）
　北海道立文書館　平成15年3月
北海道立文書館史料集 第18 北海道庁例規集 第Ⅰ期 庁令布達編(5)
　明治24年～明治25年
　北海道立文書館　平成15年1月
北海道立文書館所蔵資料目録18 大蔵省開拓使会計残務整理委員文書（1）
　北海道立文書館　平成15年3月
金沢大学資料館紀要　第3号
　金沢大学資料館　平成15年3月
日光をめぐる画家川鍋暁斎と門人たち
　小杉放菴記念日光美術館　平成13年10月
般若塚・黒崎家の扇面コレクション
　小杉放菴記念日光美術館　刊行日不明
小杉放菴記念日光美術館所蔵作品撰
　小杉放菴記念日光美術館　平成14年7月
近代日本研究　19
　小杉放菴記念日光美術館　平成15年3月
関西大学年史紀要　第14号
　関西大学年史編纂委員会　平成15年3月
文書館紀要　第16号
　埼玉県立文書館　平成15年3月
桃山学院年史紀要　第22号
　桃山学院年史委員会　平成15年3月
拓殖大学百年史　資料編1
　拓殖大学　平成15年3月
広島大学史紀要
　広島大学文書館設立準備室　平成15年3月
書陵部紀要　第54号
　宮内庁書陵部　平成15年3月
新島研究　第94号
　同志社社史資料室　平成15年2月
横浜開港資料館年報　平成13年版
　横浜開港資料館　平成14年10月
東京大学大学院教育学研究科紀要　第42巻
　東京大学大学院教育学研究科　平成15年3月
新潟大学研究者総覧　2002
　新潟大学　平成15年3月
近代武道の系譜
　杏林書院　平成15年4月
埼玉県立文書館所蔵文書目録代42集　諸家文書目録Ⅵ
　埼玉県立文書館　平成15年3月
向陵　第45巻1号
　一校同窓会　平成15年4月
立命館平和研究　立命館大学国際平和ミュージアム紀要第4号
　立命館大学国際平和ミュージアム　平成15年3月
歴史編纂事務室報告第24集　続　明治大学と学生
　明治大学総務部大学史史料センター　平成15年3月
京都女子大学研究叢刊36　千町地主の研究Ⅳ
　確立期における地主的土地所有の構造と展開
　京都女子大学　平成15年1月
大学史編纂と大学アーカイヴズ　野間教育研究所紀要第45集
　野間教育研究所　平成15年3月
立教学院史研究　創刊号
　立教大学学院史資料センター　平成15年3月
名古屋大学博物館報告別冊9号 Gravity Research Group in Southwest Japan
　名古屋大学博物館　平成13年12月
名大史ブックレット6　草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治
　名古屋大学博物館　平成15年3月

名古屋大学博物館報告　第18号
　名古屋大学博物館　平成14年12月
世界のなかの江戸・日本
　田仲一成　平成６年10月
神奈川大学史資料集　第十九集　神奈川大学会議録（四）
　神奈川大学　平成15年３月
学校教練必携軍事講話乃部前編
　土田直鎮（照沼康孝氏仲介）　昭和13年７月
学校教練必携軍事講話乃部後編
　土田直鎮（照沼康孝氏仲介）　昭和13年８月
教練教科書学科之部
　土田直鎮（照沼康孝氏仲介）　昭和17年２月
向陵記　恒藤恭　一高時代の日記
　大阪市立大学　平成15年３月
十年の歩み一般教育部成立十周年記念誌
　照沼康孝　昭和63年７月
拓殖大学百年史研究別冊　拓殖大学百年史編纂拾遺Ⅱ
　拓殖大学創立百年史編纂室　平成15年７月
写真集帯広畜産大学五十年の歩み
　帯広畜産大学　平成３年５月
宮崎大学五十年史
　宮崎大学　平成12年11月
Higer Education for Tomorrow International Christian University and Postwar Japan
　国際基督教大学　平成15年６月
東北大学百年史　４部局史１
　東北大学　平成15年５月
鬼頭鎮雄著　九大風雪記
　九州大学大学史料室　平成15年３月
COE研究シリーズ１　大学の統合･連携
　広島大学高等教育研究開発センター　平成15年３月
高等教育研究叢書72　ブルゴーニュ大学
　広島大学高等教育研究開発センター　平成15年３月
高等教育研究叢書73
　地方における旧制高等教育機関利用層の比較分析
　広島大学高等教育研究開発センター　平成15年３月
高等教育研究叢書74　大学職員研究序論
　広島大学高等教育研究開発センター　平成15年３月
大学論集
　広島大学高等教育研究開発センター　平成15年３月
広島大学高等教育開発センター30年の歩み
　広島大学高等教育研究開発センター　平成15年３月
名古屋大学大学史資料室保存資料目録第３集
　名古屋大学大学史資料室　平成15年３月
「開かれた大学」とこれからの文書・資料管理・情報公開　平成13年度名古屋大学史資料室公開シンポジウム報告書
　名古屋大学大学史資料室　平成14年12月
名古屋大学史紀要　第11号
　名古屋大学大学史資料室　平成15年３月
名大史ブックレット６　草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治
　名古屋大学大学史資料室　平成15年３月
名大史ブックレット7　名大祭
　名古屋大学大学史資料室　平成15年３月
九州大学大学史叢書　第11輯　定年退職予定教官特別寄稿第三編
　九州大学大学史料室　平成15年３月
横浜開港資料館紀要　第21号
　横浜開港資料館　平成15年３月
沼津市明治史料館史料目録31　獅子浜植松家・口野小池家文書目録
　沼津市明治史料館　平成15年３月
沼津市明治史料館史料目録32　足保区有文書目録
　沼津市明治史料館　平成15年３月
沼津市博物館紀要　27
　沼津市明治史料館　平成15年３月
野間教育研究所　戦時下教育資料４　山口県立山口高等女学校長・中谷英真「学校講話」
　財団法人野間教育研究所　平成15年５月
拓殖大学百年史研究　12号
　拓殖大学創立百年史編纂室　平成15年６月

史料室日誌抄録（平成15年3月～8月）

3月12日(水) 第56回東京大学史料の保存に関する委員会
3月19日(水) 室員打ち合わせ
4月24日(木) 農学部「附属農園125周年記念行事」への協力依頼受ける
4月30日(金) 室員打ち合わせ
5月1日(火) 谷本宗生助手、専任室員として着任
5月8日(木) 法学部長室へ資料調査
5月9日(金) 『東京大学史紀要』第21号発送
5月13日(火) 衆議院憲政記念館「ペリー来航百五十年特別展」へ出展史料貸し出し
谷本室員・畑野室員、平賀文書研究会打ち合わせのため、内藤初穂氏宅訪問
5月14日(水) 文学部社会学研究室「開室100周年記念刊行物」編纂のための資料収集へ協力依頼受ける
5月26日(月) 小川室員・畑野室員、「学徒動員・学徒出陣」に関する聞き取り調査のため、内藤初穂氏宅訪問
5月29日(木) 第57回東京大学史料の保存に関する委員会
5月31日(土) ～6月4日(水)
谷本室員、「全国地方教育史学会第26回大会」参加及び資料調査（石川県立歴史博物館・金沢市ふるさと偉人館・金沢大学資料館・金沢大学50年史編纂室・金沢大学附属図書館・石川県立図書館・金沢市立図書館）
6月5日(木) 『東京大学史史料室ニュース』第30号発送
6月12日(木) 谷本室員、総合研究博物館「学位記展」打合せ出席
6月19日(木) 憲政記念館「ペリー来航百五十年特別展」出展史料返却
7月7日(月) 大谷大学「真宗総合研究所真宗学事史研究班」見学のため来室
7月9日(水) 総合研究博物館「学位記展」史料貸し出し
7月16日(水) 谷本室員・小川室員、「第34回全国大学史資料協議会東日本部会」参加
7月17日(木) 法学部部長室から史料寄贈受ける
7月26日(土) 谷本室員、「2003年度WEF国際教育フォーラム」参加
7月31日(木) オープンキャンパス見学者向けに小展示と資料配布
油井原均教務補佐員退職
8月1日(金) 今泉朝雄教務補佐員採用
8月3日(日) ～4日(月)
谷本室員、旧制高等学校記念館「第8回夏季教育セミナー」参加
8月11日(月) 室員打合せ
8月18日(木) 内藤初穂氏から史料寄贈受ける

この間の閲覧者数
学外者　21名
学内者　23名

主な学外閲覧者所属機関
旧制第一高等学校同窓会、(財) 武生郷友会、中京大学、群馬大学、日本テレビ、福井県立藤島高等学校、広島修道大学、立教大学、和歌山大学、新潟県立長岡明徳高等学校、広島大学

文献撮影・複写許可件数　33件
調査（照会）件数　92件

《着任の挨拶まで》

本年5月1日より、東京大学史史料室の専任室員に着任しました谷本宗生（たにもとむねお）です。専攻は、近代日本の大学史・高等教育史研究です。地道で着実な前任の中野実室員の活動を継承していくつもりです。皆さんの身近で大学の歴史にかかわる情報や史料などありましたら、大学史史料室までお知らせください。皆さんから提供を受けた貴重な情報や史料などについては、できるだけ史料室ニュースや紀要に取り上げていきたいと思います。今後とも、どうかよろしくお願いします。

題字　森　亘元総長

東京大学史史料室ニュース　第31号

発行日：2003年11月30日（年2回発行）
編集・発行：東京大学史史料室
東京都文京区本郷7－3－1
電話：03（5841）2077（直）
印刷所：株式会社 芳文社
東京都町田市1-18-18

Archives Section of the University of Tokyo